

西遊夢錄

(二)

(II) 蘇國高地人の言語

瀧川規一

今日では英語の勢力が大英諸島の山間僻地まで行き亘つて居るが故に他國からの旅行者にとつては英語さへ人並みに判つて居れば何の不自由もなく高地や島嶼地方の旅行が出来来る

愛蘭の隅々は申すに及ばず、ウェールズの山奥は愚か、蘇格蘭の高地地方や島嶼と雖も小學校では標準の英語で授業をして居るのだから、これ等の僻地にても意志の疏通が充分出来る。斯う簡單に考へて旅立つ前に地圖と旅行案内と汽車時間表とな調べ、旅行季節の所謂 *Doing* をなすべく各國の旅行者の群に交つて廻歷の旅をすまず者が多い。旅客に不自由を與へず愉快に目を送らしめて旅客の財囊を輕減せしめることをもつて目的とする人達に接して得たる所感をもつて旅行の印象記を作るとするならば、今茲に掲ぐるが如き題目は不要なことである。何とならば上述の如き旅行者には蘇國に於て高地人の言語たる *Gaelic* 語を聞く機會がないからである。

わがアイヌ語には立派な叙事詩が古より存在して居る。人種言語の滅亡と共にその人種特有の文學が減び行くことを悲しむアイヌ研究者の悲歎の情に當つて共鳴したことがあつた英語の壓迫の下に粉碎されて古代人の言語たるゲールリツク語

やウェルシュ語の滅亡と共にそれ等の文學も共に滅び行く運命をもつのではないかと思つたことがあつた。

渺たる一二の島嶼に於て、而かも世界を征服せんとする英語と云ふ言語的勢力の本國たる御膝下に於て三種の言語が依然として話されて居ることそれ自體が矛盾であると云へぬことはない。然るに事實英語の本國でありながらゲールリツク語を喋る人の數の多いことに驚くのである。

ゲールリツク語と云へば云ふまでもなく愛蘭や蘇國北方の高地や島嶼に先住人種 *Picts* 人を押し分けて侵入して來たセルト人種の一たる *Gael* 人種の言語である。今日英語の勢力の爲めに縮少の運命を見てもあることも事實であらうが、今日猶蘇國のみにてもゲールリツク語を喋る人の數が二十五萬人あり愛蘭にては七十五萬人あり、その他の島嶼に於て一萬近くの數があると云ふ。勿論ゲールリツク語のみを喋る人々及び英語を兼用の出來る人々の數を統計的に種類別にする必要もないが、兎に角蘇國の高地地方や島嶼地方に於て往々土着の人々の間に交はざるゝ對話がこのゲールリツク語にてなされ居ることを耳にし、歌はるゝ歌謡がゲールリツク語で得意の美聲に聽

客を魅することを経験するのである。

ゲールック語復活の勢のすさまじさから云へば愛蘭が第一である、前世紀よりゲールック語復興運動が起り、今日愛蘭自由國に於ては小學校の教員、官衙の役員の登用試験に於てゲールック語の試験をする、ゲールック語で書いた記事を英語と併用してゐる新聞の刊行を見る、更に自由國議會の代議士たる資格にゲールック語を喋り得るや否やの條件を加へるなどの斷乎たる手段をとるなど、如何に政權復活と共に文學的言語的運動が劇烈になつて來てゐるか今日愛蘭文學に興味をもつ人々の知る處である。

余がダブリン市に行つた一九二五年に於て既に同市の町々の名がゲールック語と英語とを併行に記されて居り、船着き場の Kingstown の波止場にゲールック語にて停車場の名を文字太とに書かれてゐるのを見て驚かされたのである。

蘇國にては左程でもないが、ゲールック同盟の本部がインヴァネス市にあり、音樂文學の集會に於てゲールック語の詩歌の讀誦があり、ゲールック語の古典文學の研究會がある。

また全英蘇兩國の大學を通じて文學科にはゲールック語及その古典文學の研究を目的とする分科があり、古典並びに現代ゲールック語の刊行書を見るなど蘇國の文物を全般に亘つて考察するには等閑に附し得ざる一大勢力なのである。

同じくゲールック語だとい口に云て了へばそれまでであるが、今日愛蘭で喋べられるゲールック語と、蘇格蘭のゲール

ック語とは非常な差異があり、愛蘭で喋らるゝものは愛蘭語と別稱せらるゝに至つてゐる。またマン島にて喋らるゝゲールック語はマンクス語と稱せられてゐるが、これは寧ろスコットランドで喋らるゝゲールック語に近いものである。今日上述の如く全然別個の言語であるが如く一見耳に響くが、よく傾聴する時、また文字にしたものを讀む時、三者共に共通系統の言語であり、地方によつて生ずる訛の進化に過ぎないことを發見するのである。それもその筈で、十八世紀頃までは文字にあらはれたゲールック語は愛蘇兩國共に共通の一言語であつたのである。

愛蘭と云ひ、蘇格蘭と云ひ、兩者共に古典文學の誇るに足る可きものをもつてゐるのであるが、惜しいことには英語が汎世界的であるに反し、ゲールック語は局地的である。故にゲールック語を棄て去ることを欲せずその文學の脈絡を持續し民族固有の思想を世界に發表せんには自然英語を借らなければならぬ運命に立ち至つて居るのである。

愛蘭の文豪イエツの主張するが如く Anglo-Irish の形式をとるか、さもなくば Douglas Hyde 等の主唱したが如く純ゲールック語宣傳を主とするが、彼等は二者一つを撰ぶ可き岐路に立つてゐるのである。愛蘭語と云ふ時は上述の如く愛蘭人の喋るゲールック語のことであるが、たとへ英語を強制的に教へられて來て今日英語を喋つてゐても英蘭人の英語とは異つた要素をもつてゐる。

愛蘭の英語には祖先傳來のゲール語の語脈の面影がどこやらに残つて居つて全然に去されずにある。それでもよいからゲール語承來の思想を英語にて發表し得る方が得策である」と云ふのがイエツやウングなどの主張であつた。勢の迫る處止むを得ぬ考であり、今日愛蘭文學の隆盛を見るが故にアングロ、アイリッシュの主張は成功を見、世界の視聽を愛蘭文學に集め得て居るが故にその主張の正當なりしことを證明してあるやうではあるが、純ゲール語復興運動の立場から見るときは物足らぬ姑息策のやうに感じられるであらう。

普通蘇國語と稱せらるゝものは蘇國の低地地方に行はるゝ古代英語に近き言語である。スコツチで書かれた古典及現代文學も亦その數多く、現代でも純スコツチで喋べる老人等が居ることは事實である。余がアバイン滞在中懇意の蘇國人が特に毎夜毎夜スコツチで書いた短篇小説集を讀むことを數へて呉れ、遂には純スコツチ語で口を利く老農夫の云ふ言葉が余に判るか否やを試すべく老人の許に訪れたことがあつた。純スコツチ語を喋る人々も段々數が減じて行く。然しながら低地人の英語も亦倫敦人の英語とは趣を異にしてゐることは英語を研究するものの等しく知る處である。

蘇國のゲール語の最も古い文書としていつも喧傳せらるゝものは十一世紀頃のものである *The Book of Deer* あつて、*Deer* と云ふ處の僧院に興へられた土地の寄進帳に記入の文句である、そのうちでも最も尊重さるゝものは *Deer*

の終起を書いた十九行の散文である。これは普通に古代ゲール語を代表するものであるとせられてゐるが、今日學者の研究の結果によれば發音學的に見て衰退した初代愛蘭語の一種に過ぎないものである。

次に中期ゲール語を代表する文書には發音學的に記載した *The Book of the Dean of Lismore* と題するものであつて *Aryllshire* 中にあつて一處 *Lismore* の僧が一五二二年頃に書いたものである。その他 *Mac Varich* の *Sannachies* と題する *Mass* (手寫本) があり、一六八八年頃に書かれた *The Fearnag Mass* と稱せらるゝものがある。

愛蘭のゲール語も亦古代愛蘭語、初期愛蘭語、中期愛蘭語及び近代愛蘭語の四期に分たれ、夫々貴重なる古文書をもつてその時期を代表して居る。古代愛蘭語と稱せらるゝものは九世紀より十一世紀に至るものであつて詩散文の斷片以外に、十世紀頃のものゝ推定せられてゐる *The Book of Armagh* と云ふがあり、古代愛蘭語にて書いた物語である。次に初期愛蘭語に屬するものは十一世紀より十三世紀に至るものであつて、二大文書 *The Book of the Dun Cow* 及び *The Book of Leinster* の二書がある。中期愛蘭語は十三世紀より十六世紀の前半に至るまでのものであつて、*The Yellow Book of Lecan*, *The Book of Ballinacorney* 及び *The Lechar Breac* の三書及び *The Book of Lismore* をつてその代表的古文書とする。蘇國に於ける現代ゲール語が

單にゲリツク語と稱せらるゝ如く、今日愛蘭語と單に稱せらるゝものは近代愛蘭語たるゲリツク語を指すのである。

エザンバラ大學グラスゴ大學ダブリン大學に於ては是等の言語文學の講座が設けられて居り、倫敦大學牛津劍橋兩大學に於てもこれ等の言語文學の研究の道が開かれて居る。大英國文學中の獨立せる一現象として見て、また英文學に及す影響の顯著なる點から視ても、これ等の古典現代ゲリツク文學は如何に重要視せられて居り決して等閑に附し去る可からざるものである。セルト文學と英文學との關係は琉球語が國文學に對して有する關係以上の重大意義を有するものではないかと思はれる。

(III) 蘇國の豪族

蘇國の豪族中には純ケルト族のゲール民族より其由來を有するものもあれば、またノルマン侵入の際ウィリアム・セ・コンカラ (William the Conqueror) と共に渡英して豪族となつて居るものもあり、一克蘭中より分派して其勢力を扶植せしものもあり、其他種々の事情と歴史とを経て今日まで其命脈と社會的特種地位とを維持してある。その一族部員の多數にして勢の強きものは或はグラスゴ或はエザンバラその他の都市に於て一族會合の本部を置き同族會を組織してあるもの二三に止まらなと云つた有様である。各豪族の長たるものにして今日榮譽榮位を保持するものがあり、世人尊敬の的

となつてゐること恰も吾が舊大名舊藩士の如くである。

各克蘭の族長たる人は代々家祖の名を繼承してゐる。多少の變化はあつても其名を見る時直にその一門一族の何たるかが判明するのである。斯くの如き父祖繼承の名は所謂、*Patronymic* であつて、族長制度が行はるゝ處に於て往々見る現象である。族長制度の特徴として第一に舉ぐ可きものは族長たる人物が一族の共通の祖先を代表するものとして一族の人々により尊敬され、一族統率者たる地位に立つことである。次に土地の所有方法に於て一半は一族共有物として不可分とし、他の一半を一族の人々に分割するが、若し族員にして嗣子なき時は克蘭に復歸することである。この方法は各國の豪族制度が存在してゐた時には行はれてゐた方法であると云ふ。第三に一族に隸屬する人々即ち *Clansmen* は族長に對して子々孫々厭身的に奉仕することを以て彼等の誇りとしてゐる。然しながら彼等は必ずしも長子相續權即ち *Primogeniture* を認めて居る譯ではない。四圍の事情上適當なる統率者を欲する時は族長の兄弟若しくは伯叔父を擧げて族長とすることがある。又一克蘭には多くの家族 (*Families*) 分族 (*Subclans*) を包擁してゐるものもあり、家族側から考へて母系若しくは父系の一系を繼承してゐる共同祖先を有する家族の團體 *Sept* と稱してゐるものもある。而して *Sept* は自己自らの縞柄の服裝記章を有することがある、愛蘭に於ては *Clan* よりも寧ろ *Sept* の方が行はれてゐた。蘇國の克蘭には血

族以外のものに奴隸 *Bondsmen* が居り、養はれたる外國人なども隸屬してゐた。同族の者が同じ姓をつける時紛糾を避ける爲めに族長の家ならはす目的にて特種の氏名をつける例へば *Mac Gregor* と云ふ一族がありとすればその宗家たることをあらはす爲めに *The Mac Gregor of The Mac Gregors* と云ふ風に宗家を呼んで居るのである。豪族の名の起原な語原によつて考ふる時に噴飯せしめる程におかしな名をつけてゐることがある。例へば *Campbell* の如きはゲリック語にて *Cainbeul* と云ひ、その意味は曲つた口との義であるから、其祖先は口の曲んだ豪傑であつたのではないかと想像される。その他 *Cameron* は曲り鼻の義である。大抵の *Surname* は地名や宗教に因んだものや或は美德を擧げて名としたものである。

一族には特別の記章がある。大抵常緑樹の枝葉をもつて記章としてゐる。例へば樅 (*Oak*) とか、マートル樹とか、クロベリーとか、榛とかをもつて一族の記章としてゐる。また一族には特種の標語 (*Cr motto*) と聞の聲 (*war-cry*) とをもつてゐるものもある。標語は一族が嘗つて赫々たる武功を建てた時の勳蹟を記念する爲めそれに關係のある文句である。例へば前述の *Mac Gregor* の一族の標は *Is rioghal no dream* と云ふのであるが、その意味は「吾が族は王族なり」との意である。

Mac Alpine の一族は *Cuinneich às Alpein* の句なり

つて標語としてゐる。其意は「*Alpin* の死を記憶せよ」と云ふ悲愴な句であつて、勿論その族長たる *King Alpin* の死を指すものである。

聞の聲とは往時彼等が戦闘の時雄叫びせし突貫の聲であるが、吾々の聞きの聲の如く單に感投詞に止まらずして大抵の場合豪族一門が住居する地方の著名な山岳の名を呼んだのである。また時には山岳以外潮沼の名をもつてするものもあり或は命令法の文句をなすものさへもある。例へば *Crachan* と云ふ聞の聲は *Loch Awe* の潮邊にある山岳の名であつて *Bradalbane* に住む *Campbell* の一族も *Argyll* の *Campbell* の同族も *Cawdor* 及び *Loudoun* の *Campbell* の同族と共に用ふる聞の聲である。また *Clannanall* の *Mac Donald* の一族の聞の聲は *Dh'aindeoin co theirradh e* と云ふ長文句であるがその意味は「反對せんと欲するものはして見る」と云ふのである。

一、*Mac Donald* の一族。この一族は蘇格蘭中最古く、最有名なクランであつて、蘇格蘭西部の諸島 *the Isles* に占據した名族 *Somerled* の家より十二世紀頃に出來た家柄であることを誇りとして居る。分族が互に紛糾を避ける爲に十三世紀頃より祖先の名を繼承して *バツロニミック* を用ゐてゐる。今日では宗家の血脈が絶え、*Clannanald* と *Sleat* 及び *Glangary* の三支族の *マクドナルド* 家が對立してゐる。彼等の間には同族會 *Mac Donald Society* を設け、本部をグラ

スコトに置いてある。一七四六年の Culloden の戦に若き Prince Charles Edward の舉げた叛旗の下に一敗地にまみれて以來悲運に陥つてゐるが、三支族は夫々族長を今日猶頂いて居るのである。

一、Cameron の一族。既に述べた如く族名の語源は曲り鼻との義であるから祖先は鼻の曲つた豪傑であつたらしく思はれる。Eracht の支族 Lochiel の支族共に今日各族長としての繼承者を有してゐるが、一七四六年 Culloden の戦以後悲惨な目にあつて宗家の長は佛蘭西に亡命せざるを得なくなつた。二十五代目の宗家の族長として今日 Colonel Donald Walter Cameron, C. M. G. が居る。支族の Eracht の Cameron 家では七九聯隊を組織した豪の者が居た。今日グラスコト市にある The Clan Cameron と云ふ團體はその同族會である。

三、Argyll の Campbell 族。この一族の祖先の名は Cailean Mór と云ふが故に Mac Cailean Mór と云ふ繼承者をもつてゐる。今日の Sir Niall Diarmid Campbell は宗家の十代目の Duke of Argyll として族長の位置を繼承して居り、支族の Breadalbane の Campbell 家には Marquis として今日族長の繼承者を有した支族の Cawdor の Campbell 家では五代目の Earl として John Duncan Campbell が族長の位置に立つてゐる。矢張りグラスコト市に同族會 Clan Campbell Society がある。支族として Loudoun の Campbell

家があり今日では Countess of Loudoun として十二代目に婦人が族長の位置について居る。

四、Brodie の Brodie 族。支族として Brodie of Lethan 及び Brodie of Eastbourne がある。今日宗家の長は Ian Brodie of Brodie, D. S. O. である。

五、Buchanan 族。今日では宗家の血統絶え、土地は Duke of Montrose の手に歸してゐるが、矢張り同族會をグラスコト市に置いてゐる。

六、The Chisholms. 蘇國高地の豪族中定冠詞の The をつけてゐる唯一の豪族であつたが今は遠洲に移住して居る。

十、Colquhoun 族。今日の當主は七代目の Baronet たる Sir Ian Colquhoun である。グラスコト市に本部を置く Clan Colquhoun Society がある。

八、Cunningham 族。今日の族長は Sir Wm Gordon Gordon-Cunningham である。

数多き豪族の一家の歴史を述ぶるは餘りにくなく、單に主要なる名族の名を列挙して筆をおきた。

The Davidsons, The Douglases, The Drummonds, The Erskines, The Farquhasons, The Fergusons, The Forbes, The Frasers, The Gordons, The Grahams, The Grants, The Gunns, The Hendersons, The Johnstons, The Lamonts, The Leslies, The Lindsayes, The Mac Lennans, The Mac Alsters, The Mac Alpines, The Mac Arthurs,

The Mac Aulays, The Mac Beans, The Mac Callum,
The Mac Dougalls, The Mac Duff, The Mac Ewen,
The Mac Farlane, The Mac Gillivray, The Mac Gre-
gor, The Mac Kay, The Mac Kenzie, The Mac Kinlay,
The Mac Kinnou, The Mac Kinto, The Mac Lach-
lans, The Mac Larens, The Mac Laines, The Mac Leans,
The Mac Leods, The Mac Millans, The Mac

Nabs, The Mac Neills, The Mac Phersons, The Mac
Queens, The Mac Rae, The Mathiesons, The Menzies,
The Morrisons, The Munroe, The Murrys, The Ogi-
lvies, The Robertson, The Rose, The Rosses, The Scott,
The Sinclairs, The Skene, The Sutherlands, The Urquharts.

北米合衆國に於ける地理學界 (完結)

寺 田 貞 次

(2) クラーク大學 Clark University

ホーストン市の南方、程遠からぬ處、ウオスターに在る、エール・ケンブリッヅ大學と共に北米に於ける古い大學で、殊に地理學は盛に研究され、大規模な研究室を有して居る、人文地學者として知らるゝセンプル女史も居るので、非常の期待を以て訪問した、着したのは既に日没であつたが、取りあへず行て見る、幸町が小さいのと、電車の便があつたので、容易に行く事が出来た、圖書館だけは未だ閉て居たから尋ねて見る、圖書館の直ぐ南に續く建物が期待の地學教室で、センプル女史の御宅も直ぐ前である事が知れ愉快であつた、翌朝は折悪しく大祭日で學校は休業であつたけれども、萬一を

北米合衆國に於ける地理學界

期して再訪れて見る、暗でわからなかつた建物、早朝に見る眼には如何にも美しく映じ、閑しに劣らぬ堂々さには少からず悦んだ、大學正門前、老樹深く茂れる處、ピラ風の住宅が庭にとりかこまれて並んで居る、其の九四一番地はセンプル女史の邸である、何ばともあれ訪れて見る、老僕が取次でくれる、ハンチングトン氏からの紹介、並に先年エザンバラ在留中、彼地地學協會のニュービギン女史からも紹介狀を貰つて置いたので夫をも出す、玄關の直ぐ左側の應接室に案内される、何處も同じ各種の家具類が處狭き迄飾つてある、日本の刺繡をした美術屏風を初め、日本品の立派なのが眼につく日本人との御知合でも多いかと思つた、案の如く女史の「日